

経営者への活きた言葉

東京は本社の空洞化に直面

1. 日本を代表するオフィス街、東京・丸の内。ここに本社を置くことは、功成り名遂げた企業の証しであり、全国の経営者の夢でもあった。ところが、丸の内では2012年開業した大型オフィスビルに空室が目立つ。東京中央郵便局を建て替え、2012年5月に完成した38階建て「JPタワー」の入居率は6割という。常時満室で入居が難しかった丸の内に、かつての面影はなくなった。
2. 「丸の内の顔」である三菱グループでも、本社や事業の本社機能を移す動きがある。三菱の源流企業、日本郵船は2年前、コンテナ船事業の運航・収支などを管理する本社機能をシンガポールに移した。旭硝子は2009年、海外比率が高いガラス事業の本社機能をベルギーに集約。2012年7月には三菱製紙が都心から離れた墨田区両国に本社を移した。販売先はグループや国内からアジアに広がり、日本一賃料の高い丸の内にいるメリットは薄まった。
3. 内需が伸びている時代、東京は最大の需要地であり、都心に本社を置けば系列企業や官公庁、銀行とのパイプも作れた。だが、グローバル化で状況は変わった。生産や市場は海外へ移り、東京は本社の空洞化に直面する。2011年までの10年で、8823社が東京から東京以外の国内へ本社を移転したという事実は重い。

(参考:「日経ビジネス」2012年12月17日号)

経営者のための理念・哲学

リーダーの必須条件「修身」

1. 古来、リーダーたる者には必須の条件がある。「修身」である。気まぐれ、わがまま、むらっ気を取り去り、自分という人間を少しでも立派に磨いていく。これが「修身」である。上に立つ者の必読書とされる「大学」が最も重んじるのも「修身」である。身を修めていない小人しょうじんが上に立つと災害が並び至とも指摘している。その修身の土台となるのが格物・致知・誠意・正心である。
2. 心は発達するものであり、七つの段階がある。第一は自己中心の心。赤ちゃんがそれである。自分の欲求だけに生きている。第二は自立準備の心。幼稚園児の頃である。用事を手伝ったりする。第三は自立力の段階。成人を迎え自立する。第四は開発力の時代。困難に立ち向かい、開発改善していく力を持つ。年齢的には30～40代か。第五は指導力。40～50代になり部下を指導していく。第六は包容力。第七は感化力。その人がいることで自ずと感化を与える。最高の状態と言えよう。

(参考:「致知」:2013年2月号)